

平成31年2月8日(金)

大学進学と進路

正月の2日に、教え子との同窓会にて、一人の教え子の娘さんが、東京から戻ってもう一度いわき短期大学に入学をして、幼稚園の教諭を目指すという話をされた。私は、いいことだねと伝えた。

そもそも、やりたいことは刻一刻と変わるのであり、その変わりたいことがわかって向かっていくのなら、非常に喜ばしいことではないかと思うのである。

私自身、大学は文学部に入学し、教員になるとは思ってはみたものの、いわき教育事務所に講師希望の手続きはしていたが、大学4年生の1月までは、具体的な進路もはっきりとせず、3月になってようやく、時間講師としての面接のために、平工業高校の校長室に行き、20日過ぎになってようやく決定したのを覚えている。

その先は、1年の時間講師の後、正式採用となり、白河第二高等学校に勤めるのであるが、同じように、ひよんな出会いや方針転換によって、これという道が明らかになった時には、背中を押してあげるのが良いのだと私は伝えた。今までも、同じようなことがあるたびに、信念があれば乗り越えられると思ってきた。

教え子たちは、もはや46歳になっている。野球部の仲間たちと毎年同じ日に集まって、旧交を温めているという。

その中に、高校時代は、ともすれば一本気な性格で、これと言ったらどこまでもという一人の生徒がいた。小学生の時に腕を折って、その腕が曲がってつながってしまい、まっすぐにならないハンデを持っていたが、毎日、何百回と素振りをする中で、自分のバッティングを身に着けた生徒であった。

今や、埼玉県警の警部になっており、「生活安全課の課長か、刑事第一課の課長ぐらいなの」と尋ねたところ、「その上司になっています。」と答えが返ってきた。ノンキャリアでは、破格の出世頭ではなかろうか。そんなことはおくびにも出さず、昔と同じように話し、昔と同じように人のことを大事にしていた。

自宅の仕事を継いでいる者、仕事以外で野球の審判を一生懸命にやっている者、教育委員会に勤務している者などそれぞれが懸命に生きているのがわかって、ほっとしたのが本音であった。

大切なのは、いつだってどこだって、自分の進む道を生きることであり、昔の友達を大切にして、いつでも会える自分であることなのだ。教え子たちに教わった。こうして、教員生活の最後の年を迎えようとしている自分は、この生徒だった者たちに救われてきたことをいまさらながら思い知ったのである。